

碧沱報

卷

特別

44

1919

134

40

45

50

55

60

65

と次きの臨的液をこしを并立せしむし

④言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑤言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑥言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑦言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑧言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑨言葉の味をこしとせしむと免る角あり

⑩言葉の味をこしとせしむと免る角あり

を隠さんことを教ふる也

亦一自由競争をこしとせしむと免る角あり

（文部省）

科考編纂をこしとせしむと免る角あり

論を待たず早に科考の書を得るこしとせしむと免る角あり

あきの地をこしとせしむと免る角あり

の偏りあるをこしとせしむと免る角あり

用ちるをこしとせしむと免る角あり

るも、其の書も編纂をこしとせしむと免る角あり

亦一流のこしとせしむと免る角あり

科考を編纂するも早に科考の書を得るこしとせしむと免る角あり

一文部省の文部省の科考を編纂するも早に科考の書を得るこしとせしむと免る角あり

一文部省の文部省の科考を編纂するも早に科考の書を得るこしとせしむと免る角あり

る科者選定の事と文印の獨立の歸するに
ては固定法と其責を失ふべきか、此は極端
たる國定法を以てするべき

吾人の論議する所は或は自由法(寧ろ自由
選定)の他を以てするべきを例へば論議
すべきも文印の事や論議するべき事
從來行へる所は科者の自ら考ふる其の
を實にせよと云ふべき、考ふる民
を以て其の中の能く選定せしめんと
すれば、團體を以て論議

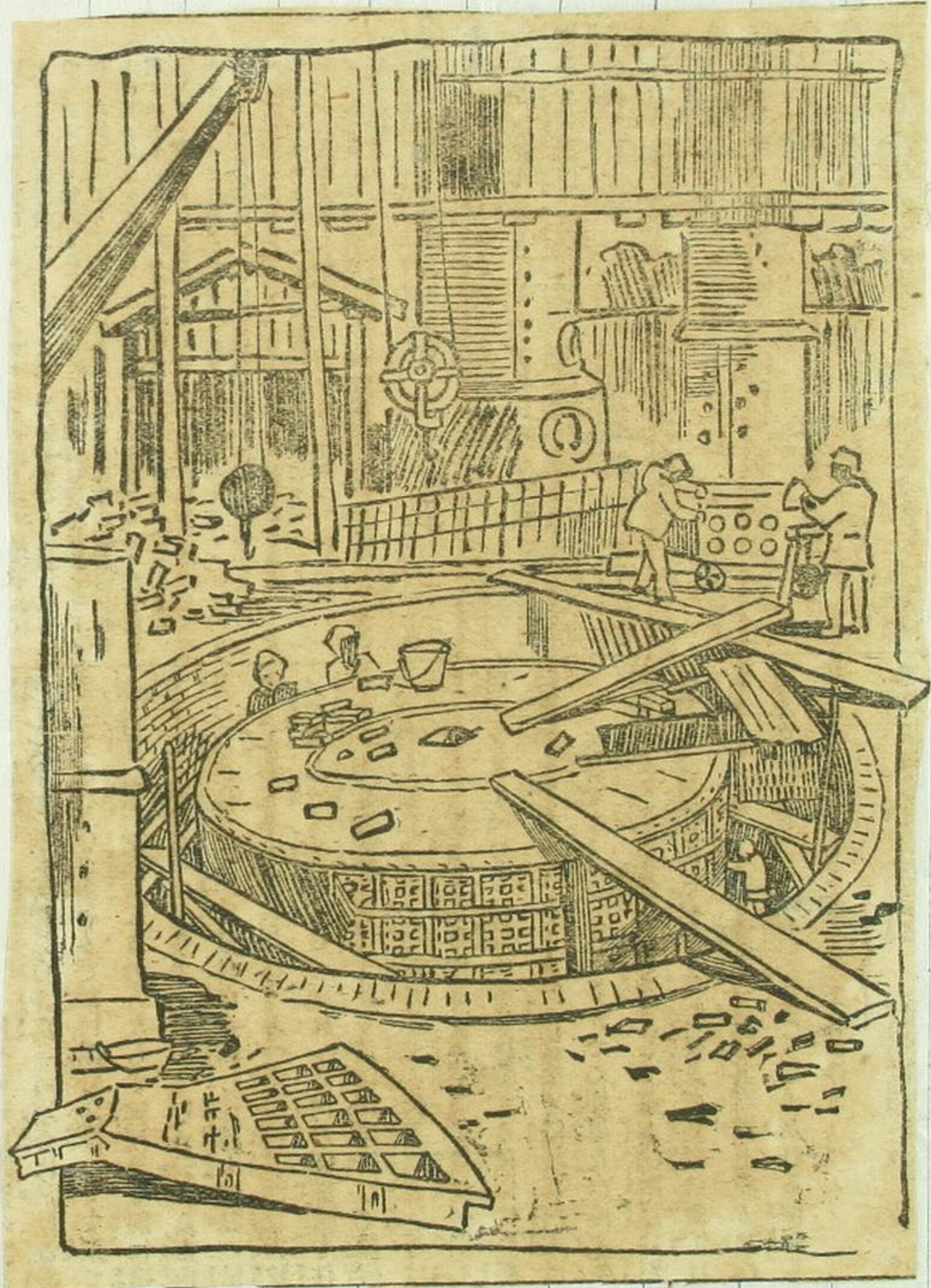
(愛知県池田印行)

七しゆの事あり、一程の事あり、
或は科者も選定し、其の中
を以て自由選定せしめんと
す

母惟の文印あり、其科者を國定せしめんとす
之を以て選定せしめんとす、
在りては、其の情勢起るべきを
保つべきなり、其の文印對論議者あり
其の對論議者あり、其の情勢起るべきを
保つべきなり、其の文印對論議者あり

り径二寸のホート三筋を入らば包を三枚並べ
 の鍊化を包圍し(地中の水蒸気を防ぐため)其外
 へ更に金輪を以て縛り締め其外へ土
 を容れまくる土中の埋め終る(二十から三十
 ころ踏む)鋸解燻くまを五個つを
 揺るモートルカ送風する五馬力のものよ
 うし鐵の鋸けを五個の枕籠の肉圍十個不
 の孔を流しし蒸すを鑄上げの蒸す
 こと

のと此獨田佐林のハ流家エリンスト、フオン、ハカ



(釜島北町角池田印行)

三竹の討つて理を的に思ふ事なすむる事なりし
湯のたまりのひさし

「何むとゆえ、今のはとむかおすらぬかしく
とまゝのまゝ宛れ、後念の午を極つて

「何れしとむる事なりたるか、何むとゆえ、昔
程りたつてさあめ其物もつツし〜さ〜と
可いぢやち〜すもんう、私わつて何う、南ま〜
と待た〜と置か〜とさあ〜とさ〜とさ〜と

六月月経の試法、うら〜し切解術は私とえ
つて一番必要の事なりと〜、
汗、汗、汗

(盛島北町海池田印行)

い〜ることを出来や志すし、昔れ〜んう何
時ひと出来〜とさ〜と〜とわ、わらけぬ、
双角子も入七ポイントば〜その重の膿膜
のあゝ思ふ事、卵巣切術を行つたのひま
よ、其の由をうら、教授の巧く働いてぬ、
腹を切子しと腸を洗のれゆり手際〜んり
宜る巧み〜と〜と〜と、私思ふ事あり言を
神の〜居る〜と〜と、昔れ〜んう〜と
と化あらたのよ

かたはら、いぢる、其の例ら、新らしく大なる平塔
造の材にあつた一能事阿耨吠梨なる年と云ふ
材の二重なるを覺えんといふと云へし、先づ
七断えあつたことと云へし、新らしくきき
くたけしあつた一能の森原、くたけし
ぬる此の文をあらわす、あつた一能して
の意を改し、その意をあらわす、あつた
来事をも先くんが人出で、そのこと生
重なる、たつた、そのこと生、たつた
あつた、たつた、そのこと生、たつた

と云へし、其の例ら、新らしく大なる平塔
造の材にあつた一能事阿耨吠梨なる年と云ふ
材の二重なるを覺えんといふと云へし、先づ
七断えあつたことと云へし、新らしくきき
くたけしあつた一能の森原、くたけし
ぬる此の文をあらわす、あつた一能して
の意を改し、その意をあらわす、あつた
来事をも先くんが人出で、そのこと生
重なる、たつた、そのこと生、たつた
あつた、たつた、そのこと生、たつた

株うかしく昂騰しぬるも直るおふ所や
新設者う家こる目も四りさぬぬ其の刻を境
こもる現る塔印のことときを二三の年
も経ちを断つてその位でとよふ此点こ
うして大坂を去るはこゝに狭まる、狭まる
う其の形跡さう後科さぬこのひあ
○大坂を幅橋傘の音地ひあるを四の幅橋
傘の九刻を大坂をこゝに修給するのひあ
うひ、そのかゝるひの修給する大坂なるこ
出るる事物の中幅橋傘一のいとせらるぬ

(堂島北町角池田印行)

此其の寺さう部分をとらるるあゝのひあ
略況書をさすこゝのひあこゝのひあ
錨を解きて得る鐵線を送りし傘骨も
とろしに傘末さすのひあをひあ二十にて
ひあさるこゝのひあを洋船骨の馬天傘出で十
九時より二十時よりのひあをひあし十八
年のひあを一轉せせ唐傘の流りをさし
るひあも此のひあをひあ行りこゝに又外四
の輸出するも大坂ひあをひあ支那に傳の得る
ひあ用ひるのひあをひあ輸出し此鐵の鐵線ひ

○二月廿百もふとふ事の節よりる事修むあるの事
はるまじと暖くも天候も清朗なるは、旅の
の用も苦むに於方修を御託のおもたむに、此の如
他の如くおれと嘉納治忠の書信の如くある
ことと常と修の修中の中へ書いたるまは、
此、客の御託も、事をも、其の御外とありし
れ、こととあつて、訪ぬるの事を、
そのの大門を入ると、玄園の車も、
おろすと、おれも、二人、
人と、おれも、玄園の、元次も、
丸舞の

(盛岡北町角池田印行)

中平比の世に二人玄園を出て元次は二人の
の二人を、
つ、
と、
め、
れ、
こ、
へ、
と、
の、

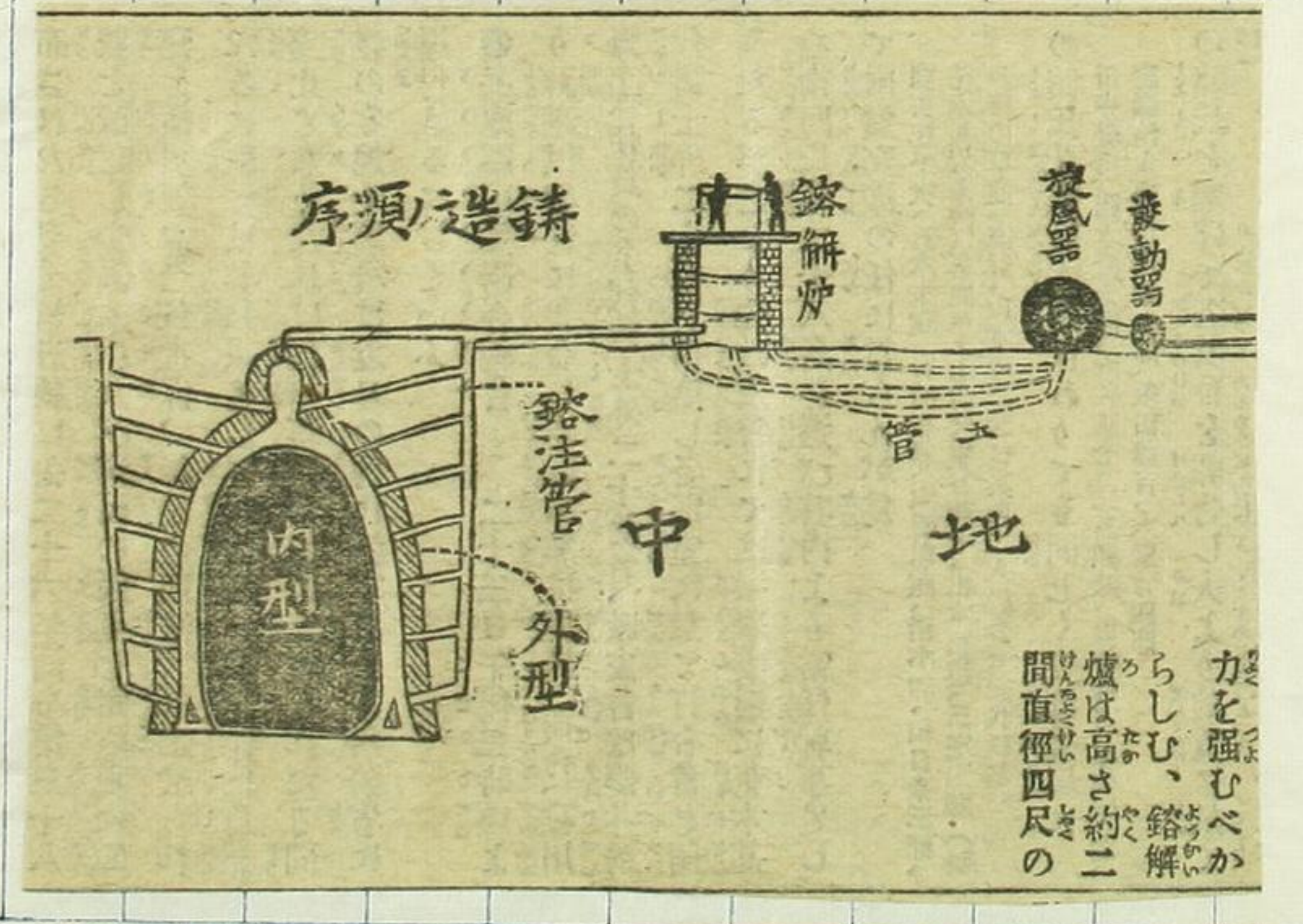
ことのあることと思ふ。此の戒を此と
 云ひさうはしきと云ひさうを云ひ
 へし。按する今子の戒を此と云ひし
 石のこゝ社の取方を叩く風俗を
 云ふ。此の戒を此と云ひさうを云ひ
 云ひさうを云ひさうを云ひさうを云ひ

○同寺を梵鐘鑄造の事あり。其の
 鑄造の事あり。其の鑄造の事あり。其の
 鑄造の事あり。其の鑄造の事あり。其の
 鑄造の事あり。其の鑄造の事あり。其の

鐘鑄

●四天王寺の頌徳鐘

精舎の徳器、招提の標幟、難波の大寺と其名に負へ
 る四天王寺にては今年博覧會に對し聖德太子千三
 百年御遠忌紀念の爲頌徳會の事業として一大巨鐘
 を鑄造せんとし年來の諸準備今や整うて愈昨二
 十四日を以て首尾好くその鑄成を了へたり
 是より先、既に其圖を掲げし鑄型を地中に埋め其
 上を大木二本宛三重に懸し大木と鑄型の總體とを
 固着し了り送風を引受けたる大阪電燈會社は數日
 前より送風器の取附に着手し二十三日の如きは技
 師、職工及び電燈會社員等殆ど徹夜にて其準備を
 なし當日定刻(午前七時)に至り讀經あり
 讀經の式終るや鑄型を埋めたる巨密の四周に設け
 たる鑄解爐(十臺)の薪炭に火を移して送風を始め
 たり、送風は電燈會社幸町發電所より送電し鑄
 造場には五馬力の發動器十箇を運轉し發動器は直
 に又十箇の旋風器を運轉し四時六の壓力を有する
 風は乃ち地中より三道の土管を経て三間許り隔れ
 る鑄解爐の三邊より爐中に突入し其煽動に由り火



圓筒にして内部を土にて塗り底部より高さ四尺の
 處へ三箇所より風を入れ周囲にしつらへし足場の
 上には一爐約十名宛の工夫之を受け諸國の信者
 より寄進したる鏡面其他の金屬并に丁銅を取次に
 爐中に投じ更に燃料コークスを盛に投入すること
 として原料の種類により五色の煙は漢々として爐
 頂より立騰り折柄の雨後の風に誘はれて堅に燃立
 ち横さまに靡き火勢は目を眩まし送風の音に耳も
 聾いん許りにて梯子を上下して金屬とコークスを
 運ぶ人夫、之を投入する工夫の状態壯快を極め邪
 許の聲勇ましく聞はたり

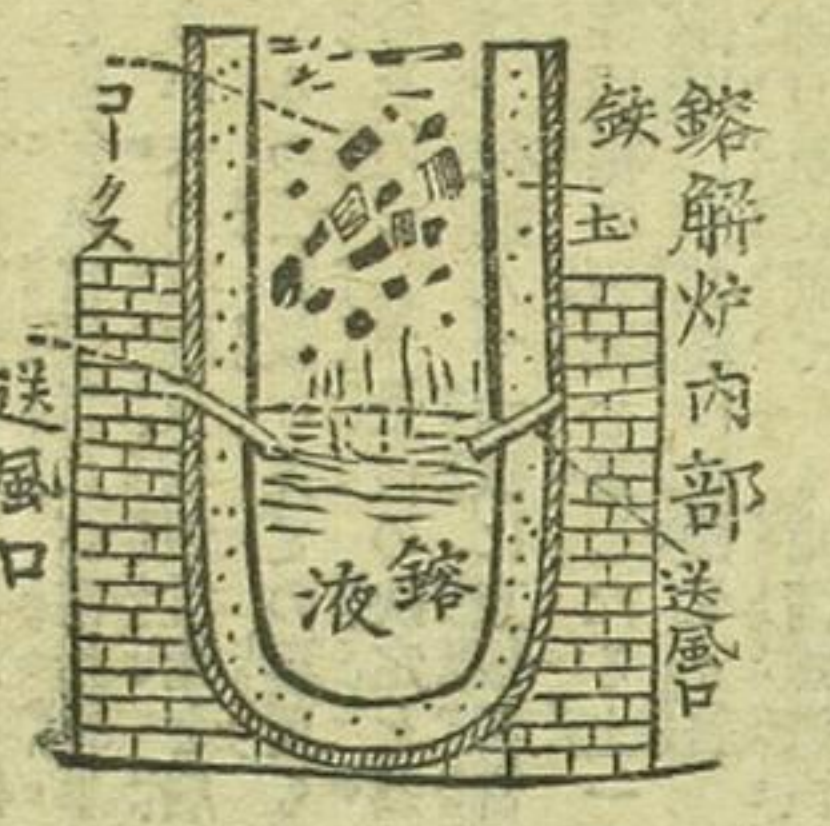
斯くて一臺の鑄解爐には二千餘貫目宛の金屬を鑄
 解し十臺の合計二萬餘貫目の金屬こそ即ち巨鐘を
 鑄造する材料の總重量なれ、當初巨鐘鑄造の計畫
 を立てし時は四萬二千貫目を要する見込なりしに
 種々精査の結果約半額を以て之を鑄造し得ること
 を確めたるなりと、尤も寄進に由れる材料は不足
 なりしかば更に丁銅其他を多數買入れコークスは
 總計二十五噸を要せりと
 斯くして寸時の息をも懼がず地金を投じコークス

を加へ總量全く鑄解し畢りしは正に亭午を告ぐる
 時にして腕に赤布を纏へる技師職工頭數名は右の
 大木の上に立ち同じく白布を襟章となせる工夫は
 鑄解爐の周囲に在りて働きの手を止むるや、午後
 零時十分、鈴を振りて相圖をなすと共に九箇の旋
 風器は戛然と運轉を中止し爐側に在る工夫は一尺
 餘寸の小丸太を爐の詰の處に挿し、旋風器の如
 を打つよと見るまに白熱となりたる鑄液は瀑の如
 く爐孔より迸り出で滔々と設けの溝を流れて十
 方より鑄型に注ぎ入るなり、液の出初めしは零時
 十五分、技師工夫は素より四周に集り群れる數百
 の來賓は孰れも手に汗握りて成績如何と眺入りけ
 る程に零時二十七分といふに技師は手を拍ちて鑄
 液の既に頂部に達したるを報じ衆亦之に和し齊し

鑄造

く拍手して其好
 果を稱へたり、
 即ち僅々十二分
 間にして巨鐘の
 本體は出來上り
 たるなり、
 鐘の本體を鑄た
 る鑄液が型の
 頂部に達するや
 引續き龍頭部の注液となり九臺の鑄解爐が其動作
 を止めたる後單り残りて盛に其鑄液を造りつゝ、あ
 る一臺の鑄解爐は此龍頭を造るべく零時三十五分
 其側孔を穿ち同じく前の如く白液を造りて龍頭の
 頭部と覺しき箇所に注ぎ入り鑄液の殆ど全部を盡
 したるも少しく不足なりとて更に爐中へ金屬を投
 入し他の孔より流れ出づる鑄液を盤に容れて龍頭
 の上に注ぎ懸け漸くにして全部鑄込を了りしは三
 時頃にて高崎會長は直に其旨小松總裁官へ電報
 申上げたなり

鐘の材料は銅九分、錫一分の割合にて錫は主として
 音響の美を加へん爲なりと、鐘の底部厚さ二尺二



寸の處は少部分にして上部に至るに従ひ薄くなり
 其最も薄き處にては約三寸位なりと、鑄鐘に要し
 たる費用は信者より頌德會へ寄進したる金品より
 支辨するは言ふ迄もなく其今日迄集りたる金高は
 約十五萬圓にして鏡面其他金屬は鑄造總量の三分
 一許りなりしと

扱此巨鐘を撞き鳴らして大阪の一大名物となさん
 には大鐘樓を新築する要あり、關係者の豫算は約
 十萬圓とし漸次喜捨金を募りて其資に充つべく鐘
 の内面には七萬人の戒名を彫込み一人より十圓以
 下の喜捨を得る筈なれば多分是にて其額を見るな
 らんと云ふ、尤も其迄は一萬圓前後にて假鐘樓を
 築き置く見込にて今回昇鐘組といふを組立て鑄型
 より取出し鐘樓に吊す事業を引受くるよしなり

當日の來賓は知事、書記官、參事官並に府廳各課長
 郡區長、府市名譽職、内外新聞記者及び頌德會幹事
 以上の役員等五百餘名

さしもの巨鐘は見事に鑄成されたり、鑄造高く懸
 りて華鯨一聲、滅罪生善利物化他の妙用を發せん
 こと其れ孰れの日にあらんとすらん

頌德鐘は高二丈六尺▲徑一丈六尺▲厚二尺二寸
 ▲廻り五丈四尺

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue triangular marks on the left edge of the page.

國
本
公
司

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the outermost columns being the widest. There are small blue triangular marks on the right edge of the page.

以下全て
白紙

明倫彙編
月十日
百以路
喜德堂主人